

## ろ 論より体験

まちづくりプランナーとして将来のまちの姿を示すのは重要な役割のひとつである。しかし、どのように将来像を示すと住民の共感を引き出すことができるのか。まちづくりの提案書では、提案の基本的な考え方を短い文章にして伝えることが多い。ただ、それが住民の心をぐっとつかむものであることは稀だ。ややもすると流行りのキーワードを並べてみたり、広告のキャッチコピーまがいのフレーズに凝ったあげくに、かえって何を伝えたいのかがわかりづらくなったりしているものも見受けられる。提案の説得力を高めるのに数字を活用する場合もあるが、現状の課題分析はともかく、将来を数字で示されると、どこか胡散臭い感じがしてしまう。

将来のまちの姿をよりリアルに伝えるためにコンピュータグラフィックスを活用することも考えた。これは、いろいろな解釈ができる文章よりまちの将来像を視覚的に捉えることができる点で優れていると思われたが、使い方がなかなか難しい。そもそも不確定なまちの将来像を具体的にビジュアル化することの限界もある。また、まちの物的な姿を示すことができても、そこでどのような生活体験が待っているのかまで伝えるのは難しい。あまり詳細に表現してしまうとまちの将来に対してのイマジネーションを沸かせる余白が失われてしまう。

それに対して、まちの将来の姿を実際に体験することのできる機会を設けるのは効果的だと思う。それが「論より体験」ということになる。そのことを実感したのは今から五十年近く前になる。往時の役割を終えて悪臭が漂う運河と、荷物の出入りがほとんど無く静まり返った石造倉庫群。それを現代に生かした将来像を訴えたのだが、多くの人はそれまでの経済発展の図式から抜け出せず、それに加えてひどい環境という現状もあり、あまり理解が得られなかった。力になったのは若者が中心になって行なった運河と石像倉庫を舞台にした二日間の音楽フェスティバルだった。数万人が訪れ、歴史的環境がまちの将来を導く可能性があることを多くの人々が体験をつうじて理解することになった。そして一番大きかったのは、そのフェスティバルの実現を担った二、三十代の若者が自分たちのまちの将来のあり方に手応えを感じ、その後のまちづくりの一翼を担ったことだ。